封じられた運命の石版

空海林

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
封じられた運命の石版

【Ｎコード】
Ｎ０１１２Ｊ

【作者名】
空海林

【あらすじ】
遥か昔から言い伝えられてきた石版があった。
今ではどこにあるのか分からない、封印された石版。
そして今、その封印は一人の青年により解かれようとしている…。
その時、世界は？生物は？どうなってしまうのか。

序章　～石版～（前書き）

ほとんどのキャラの名前、石版の文章、大まかなストーリーは弟作です。

ちなみに、細かいストーリー、場所等だけでなくリーヴも僕のオリジナルです。

序章　～石版～

「…ここは？」
辺り一面は全て暗黒に包まれている。
何も見えない。
この場所を言葉にするとしたら、一死の世界。
何故僕はここにいるんだろう？
ここはどこだ？
僕は…、誰なんだ？
分からない。何も。
とにかく、何とかしてここから出なきゃ。
僕は、一目散に駆け出した。
どこに向かえばいいのか分からないけど、そんなことは気にしない。
……？
向こうの方に、微かな明かりが見える。
「…あれは？」
とりあえず、あそこに向かおう。

◆◆◆

その光は、どうやらこの石版から出ているらしい。
表面には、字が書いてある。が、所々掠れていて、完全には読めない。
なんとか読める部分を読んでみる。
気付いた時にはすでに遅く、もうすぐ世界は――。だが、その時光の勇者が現れる。その後選ばれた四人――しなければならない。
そして――を倒し時世界は元に戻る。

「……」
これは一体…？
分からない。僕は何をすればいい？
何か大切なことを忘れている気がする。
僕は、その石版に手を伸ばす。何故かは分からない。そうしなければならない気がしたからだ。
瞬間、光が広がる。
その光に飲まれ、次第に意識が遠退いていく…。
完全に意識が無くなる直前、何かが直接、僕の脳へと流れ込んでくる。
…それは、なんだか懐かしい感じのする声だった。
「お前は大いなる力を受け継ぎし者。これから世界は闇に包み込まれることとなる。その時はお前が――。光――よ…」
僕の意識が無くなった。

一章　～暗黒～

「はっ！」
僕は目を覚ます。
ここは家のベッドの上だ。いつの間にか寝ていたらしい。
「何か…、あったような気がするけど…」
そう、とても重要な何かが。
でも、思い出せない。
暗闇で、光が…。
懐かしい声が…。
…夢？
そうか。夢か。
どんな内容だったかは思い出せない。でも不思議な夢だった気がする。
まぁいいか。そんなこと。
ベッドから降り、着替える。いつも通りだな。
今日もいつもと変わらない、退屈な日が始まる。
つまらない。本当につまらない。
何だか嫌になってくる。

この世界そのものが。

いつもと変わらない恰好で、いつもと変わらない場所に行き、いつもと変わらない仕事をする。
そんな日々を変えたいといつも思う。
まぁ、そんなのは無理か。
人生なんてものは生まれた時から決まっているものなんだから。
夢なんてものも無い。
僕ーシャインは、本当につまらない人間だ。

◆◆◆

ここは、ウレキス。
静かで長閑な村。
争いなんてことは滅多にない、平和な村。
そんな村の一角に、木に寄り掛かる形で青年が立っている。
彼の名はリーヴ。
何より平和を望む者…。「ふぅ。こんな平和な世界より、もっと争いのある…、暗黒の世界の方がいい。つまらなすぎる」
なんていうのは所詮表面上のこと。
彼は狂乱の世を望んでいる。

退屈な世界に飽きたから。

名門の家系に生まれ、様々な訓練を受けてきた。
家系に恥じない立派な人間となるために。
だから俺は、人前では教養ある人間を演じてきた。
全く。本当につまらない世界だな。
難しい問題を簡単に答えたり、強い人間を楽に倒したりするだけで、皆騙される。
誰一人として、僕の演技に気付かない。
皆、馬鹿だ。
俺以外の人間は。
こんな馬鹿ばかりのつまらない世界なんて、終わってしまえばいいのに。

◆◆◆

ここは洞窟の中。

下等な人間は決して近付こうとしない、危険な洞窟。
リーヴは、その洞窟の中を進んでいく。
危険な洞窟というのは嘘ではない。
強力な魔物が多数潜んでいる。
ふん。魔物か。
下等な生物め。
リーヴは、そんな魔物達を片手で薙ぎ倒していく。
危険？それはお前達が下等な人間だからだろ？
俺みたいな人間には、こんなところ危険でもなんでもない。

◆◆◆

洞窟の最深部。
ここには、祠がある。
大昔に封印されたという、魔神とやらが奉ってある場所。
こいつの力があれば、この腐った世界を消せるかもしれない。

そして俺は、神となる。

下等な生物どものいない、理想郷。その世界が、今から誕生する。
リーヴは、祠にあるお札を破り捨て、祠を破壊する。
瞬間、巨大な爆発が起こる。
洞窟は消え去り、現在地は外の世界へと変わる。
「ふはっ！笑いが止まらないな。こんな簡単に、世界は、消えるんだ！」
そこは…、まさしく暗黒の世界だった。
まだ完全ではない。だが徐々にその闇は広がっていく…。
「そして俺は、理想郷を創るんだ！さぁ、早く消え去れ！下等生物よ！」
リーヴの周りには、今まであった村、草原、洞窟。全てが消滅し、

暗黒のみが広がっていた。

二章　～希望～

突然の地震。雷。
様々な災害が一度に襲い掛かり、人々は皆逃げ惑う。
「これは神の怒りだ！」
誰かがそう口にした。
それほどに、異常な事態なのだ。
遠くの方は既に真っ暗だ。この黒い雲のせいだろうか？
その暗闇はどんどん近付いてきている。
本能で分かる。これは危険だ。逃げなければ。
そう。逃げなければならない。それは皆分かっている。
だが逃げることはできない。凄まじい速さで暗闇は近付いてきているのだ。
「凄い速さだ…」
必死になって村を守ろうとしている少年がいた。
彼の名はミール。
自分の村を愛し、生まれてからずっとその村で暮らし、守ってきた少年。
今も彼は村の人々を誘導、避難させている。
人々もそんな彼の指示に従っていた。
この村でのミールの信頼は相当なものだ。
それだけ彼はこの村に尽くしてきたのだ。

命懸けで。

だが、今度ばかりは自分の力ではどうすることもできない。
暗闇から村を守ることはできない。人の力では。
暗闇はもう目の前へと迫っている。
「くっ、ここまでか…」

そう言い、ミールは村の中心に立つ。
無論、村人を全て避難させた後で。
彼は村を最後まで守ろうとし、最悪村と共に消えることを願い…。

ミールは暗闇に飲み込まれた。

◆◆◆

ここはクリル。
自然に囲まれた、緑豊かな村。
その端にポツンと建つ家。
その中にはシャインが住んでいる。
何も無い、殺風景な家。
「ふぅ。今日もつまらない一日だったな」
そう言うと、シャインは家の外へ出た。
夕日が昇っている。
いつもと変わらぬ、普通の夕日。
奥の方はもう真っ暗だ。
あっちはもう夜なのだろうか？
「何か面白い事は起きないのか…」
その言葉に答えた訳ではないのだろうが。
不意に、悲鳴が聞こえてきた。
と同時に、村がどんどん暗闇に沈んでいく。
何だこれは？
確かに普通ではないことが起こった。
でも僕はこんなことを望んでいた訳ではない。

村が消えてしまうのは、嫌だ。

シャインは暗闇へと勢い良く駆け出した。

「止めろっ！」
そんな声は当然、暗闇には届かない。
依然として暗闇は速度を落とす気配がない。
シャインは暗闇に飛び込む。
そして、光。
何が起こったんだ？
僕の周りからは暗闇が消え去っている。
元通りの村が出てきた。
だが、人はいない。
暗闇はまだ広がり続けている。
もう、嫌だ！
僕は…、僕は…！
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
僕が叫び、その声は遠くまで響き渡り…。
僕から溢れ出ている光もまた広がっていき…。

暗闇が消滅した。

もっとも、全て消えた訳ではない。
僕の村と、その周りのいくつかの地域だけだが。
だがやはり、人は見当たらない。
一体どこに行ってしまったのか？
もしかしたらどこか別の町にはまだ人がいるのかもしれない。
…いや、考えていても何も始まらない。
シャインは歩き出した。
この村の外へ。
まだ光のある世界へ。

三章　～幻覚～

クリルより西に続く川、ロズ川。
この川を辿り、シャインは西にある村、シトリルへと向かっている。
この辺りはとても穏やかで、危険な生き物もいない。よく子供の遊び場になっていた場所である。
「ふぅ。どこまで続くんだ？」
ロズ川はとても長く、その奥にあるはずの森がまだ見えない程である。
もう半日程歩いたはずなのだが…。
だがおかしい。
確かに長かったが、それでもここまでの長さがあっただろうか？
まさかあの暗闇の影響で空間が歪んでいるとか…。
いや、そんな馬鹿な話がある訳がない。
これはきっと僕の思い過ごしなんだ。
きっとあと少し歩けば森に着く。
そしてあとはその森を抜け、シトリルへと向かうのだ。
別に大して大変なことではない。
それに、この辺りには危険な生き物がいないのだから、それ程警戒する必要もない。
簡単だ。
だが、何故だか僕は変な胸騒ぎを感じずにはいられなかった。

◆◆◆

あれから、かなりの時間が経った。
だが、一向に着かない。
「くっ、本当にどうなってるんだ…」
既に体力は限界だ。

これはあの暗闇が原因なのか、それとも何者かの仕業か。
全く見当が付かない。
仕方がない。少し休むか。
今倒れたらどうにもならない。
…ん？
今、何か動いた様な…。
思い過ごしならばそれでいいのだが、もしかしたらこの原因かもしれない。
その僅かな可能性を信じ、動きのあった草むらへ向かう。
「確かこの辺りに…」
草むらを調べてみる。が、特に変わった物は見つからない。
やはり思い過ごしだったのだろうか？
仕方がない。ならばそろそろ出発しよう。
さっきとは違う道で行けば、もしかしたら森に着くかもしれない。
シャインは草むらの中を歩き始めた。

◆◆◆

「ふぅぅ、危うく見つかるところだったぁ！」
さっきまでシャインのいた場所。
そこに一人の男がいた。
「全くぅ、ボスも面倒な事を頼むよなぁ。あいつを足止めぇ！なんて…」
男はポケットから一枚のカードを取り出し、投げる。
すると、そのカードは宙で鳥へと姿を変え、シャインの方へと飛んでいった。
「さぁて！それじゃ殺さない程度にあいつで遊んでみるとするかぁっ！」
男は、シャインの進んでいった方へ歩き始めた。

◆◆◆

やはり、なかなか森へは近付けない。
ここは一旦村へ戻り行き先を考えるべきか。
シャインは村の方へ戻ろうとした。
だがその時、突然の追い風により少し押し戻される。
さっきまでは風など吹いていなかったのだが。
なんとかその場に踏み止まり、風が止むのを待つ。
数十秒程経った頃に、やっと風は止んだ。
が、その先には見覚えの無い鳥が羽ばたいていた。
「これは？初めて見る鳥だが…」
「やぁやぁ、これはこれは。どうですぅ？気に入りましたかぁ？俺の可愛い鳥は」
…！
今まで人など近くにはいなかったハズだ。
だが、シャインの目の前には一人の男が立っていた。
「いやー、俺の鳥はちょいとばかし悪戯好きでしてねぇ。人を見るとついつい吹き飛ばしたくなっちゃうみたいでしてぇ」
まさか…、さっきの追い風はこの鳥が！？
それにこの男…。
危険だ。
ここは逃げるべきか、それとも戦うべきか。
だが戦うにしても、今ある武器は短剣のみ。
飛び回る鳥相手にはかなり不利だ。
「さぁぁ！もう一度追い風を吹いてあげなさい！」
またも激しい追い風。
これでは、戦う事はおろか近付く事さえ難しい。
やはり逃げるべきか…。
「はっはぁ！いやー、愉快ですなぁ！さてさて、そろそろとどめを…、うわぁっと！」

男の取り出したカードが追い風で飛んで来た。
シャインはそのカードを手に取る。
これは…？
よく分からないが、とどめを刺そうとして取り出したということは
何かしらの武器の類なのだろう。
これは…、『ファイア』？
何かの呪文だろうか。
だが今頼れるのはこれしかない。
一か八か、これに賭ける！
シャインはカードに書かれた文字を読み上げた。
「『ファイア』！」
途端、カードから激しい光がほとばしった。

四章　～魔法～

シャインの持つカードが激しく光る。
その明るさ故に前が見えなくなり、シャインは目をつぶっている。
その内にカードは消滅し、そこに光の球体が現れた。
「こ、これは？」
光が弱くなり目を開いたシャインは、その球体を取ろうとした。が、
突然その球体は弾け、中から炎でできた球体が出てくる。
その球体は敵の方へ飛んで行き、鳥に命中、お互いに消滅した。
「炎の…球？」
突然宙から炎の球が出現し、素早く動く鳥を追尾するように飛んで行った。
こんな現象は初めて見る。
「なぁぁっ！？まさかカードを使えるなんて！？」
男はかなり慌てた様子で騒いでいる。

「この世界ではまだばらまき始めたばかりなのにぃ！？」

この世界…では？
「それはどういう…」
「こぉうしちゃいられない！急いでボスにぃ伝えなくてはぁ！」
シャインが聞こうとした直後、男は素早い動きで逃げていった。
…今のは何だったんだ？
よく分からないが、あのカードのことは聞いたことがない。だとしたらあの男の言っていたことは本当なのだろうか？
だがまさか。ここ以外に世界があるなんて、俄かに信じ難い。
しかし…。もし本当に別の世界があるのだとしたら…。
「なんでこの世界でカードをばらまいているんだ？」

それだけではない。別の世界から来たということは、つまりこの世界と別の世界が繋がったということになる。
一体何故…。
…まぁ今考えても仕方がないか。とりあえず進もう。あの男がいなくなったことで進める様になっている可能性もある。
このまま先へ進めば、何か分かるかもしれない。
しかし、あのカードはもう無いからな…。慎重に進まないと、またいつあの男が来るか分からない。気をつけよう。

◆◆◆

「ここがスピネが…」
思っていたよりもずっと大きな森が、シャインの前にあった。
どうやらあの無限ループは解除されたらしく、何の問題もなくここまでたどり着くことができた。
さて、ここが問題だ。
この森は物凄い広さをもっているため、迷ってしまえばそう簡単には出られなくなる。また危険な野生生物も多く、魔物というものも存在している。
シャイン自身はまだ魔物を見たことが無いが、恐ろしく凶暴だと聞いたことがある。
気をつけて進まなければ、ここで死ぬ可能性もある。シトリルにさえ着いていない状態で死ぬ、ということは最低限避けたい。
「…よし、入るか」
森の中は、外とはまるで違っている。周りが全て木で、また野生生物の鳴き声も四方八方から聞こえてくる。
あの男が襲って来たのが草原で本当に良かった。もしここで襲われたら、それこそ森は大火事になっていただろう。
バサバサバサッ

「……！」
背後から大きな音が聞こえてきた。
「…なんだ、鳥か」
どうやらその音は鳥が羽ばたく音だったらしい。
だが、そこでふと気付く。
何故野生生物が出てこない？
入り口からはある程度歩いてきたが、虫くらいしか出てきていない。
気配はあるのに全く出てこないというのは流石におかしい。
まさか…！
ガサッ
木の陰から、物音。そして出てきた生物。
「こいつは！」
それは間違いない、魔物と呼ばれる生物だった。
確かグレィという灰色の肉食獣。群れで行動することは少なく単独で狩りをする種類だったハズ。
今ある武器は剣のみ。魔物と戦うのは厳しい。かといって逃げるにしても、グレィの素早さから考えて、すぐに追い付かれてしまう。
どうすればいい！？
こうしている間にもグレィはにじり寄って来ている。
そして一気に飛びかかってきた！
これまでか！？
諦めかけたその時…。
「『フリーズ』！」
近くから聞こえてきたその声と同時に激しい光が広がる。
その光がおさまり、シャインの目の前には氷漬けになったグレィの姿があった。

五章　～少女～

「な、……今のは！？」
あの激しい光と声、そして目の前の氷。
間違いない、魔法だ。
…まさか敵！？
もしかしたらさっきの男と関わりのある人かもしれない。だが、あの男はこの世界にカードをばらまいたと言っていた。偶然カードを手に入れただけの人という可能性もある。
何にしても警戒した方がいいだろう。
……！
木の陰から少女が出てきた。
「…あなたは何？」
思わず固まってしまう。
別に困るような質問ではない。だが、少女の雰囲気がヤバイ。
一瞬でも気を抜いたら殺されそうな感じがする。
「…あなたは何なの？答えて」
「僕は…」
何故か言葉が出てこない。
言うことを躊躇う理由もない。ただ『クリル』から来たと言うだけで済む話だ。
「…早く答えて」
僕は後退りした。
この場から逃げ出したい。でも逃げられない。身体が思うように動かない。まるで、見えない鎖で縛られているかのようだ。
「僕は…、『クリル』から…、来た。暗黒を止めたくて…」
やっと言葉が出た。
「…ふーん、そう」
早く行かせてくれ！

もう堪えられない！
「…強いの？」
「…え？」
何故そんなことを聞く？
確かにカードはもう無いが、僕には剣がある。
大概の敵ならばこれでも十分だろう。
「…どうなの？」
「多分…、そこそこは」
「…そう、なんだ」
少女は後ろを向き、僕から離れていく。
やっと行ってくれたか。
僕は警戒を解き、少女とは違う方向へ進もうとして…
「…『フリーズ』」
「なっ！？」
咄嗟に避ける。僕が一瞬前にいた場所には巨大な氷の柱が立っていた。
「どういうつもりだよ！」
「…油断しすぎ。そんなんじゃ、すぐ死ぬ」
少女はここから去るふりをして、僕が油断した隙に攻撃を仕掛けてきたのだ。
「…強いんじゃなかったの？」
「くっ…！」
思わず歯を強く噛み締める。
「…『フリーズ』」
氷の球が飛んできた。正面からなら避けやすい。
軽々と避け…
「『フリズライト』」
僕が着地した直後、僕の足元を中心にするようにして冷気が広がる。
「なっ…！動けない！？」
足が氷で固まっている。これでは身動きが取れない。

「…『フリーズ』」
氷が僕目掛けて飛んでくる。さっきの冷気により、氷の球が大きさが大きくなっている。
球の周りを氷の結晶が散っていく。球が大きくなり速さは少し遅くなっている。
「くそっ！」
剣を素早く引き抜き、氷の球を切る。
球は真っ二つに割れ、落下。
「…『アイシクル・ロープ』」
少女の足元から４本の、氷でできた鞭が現れる。
僕は剣で足元の氷を砕き、距離を取る。
「…逃がさない」
鞭は僕目掛け伸びる。
１本目を回避。が、着地予定の場所から鞭が突き出してきた。
身体を捻りギリギリ避ける。バランスを崩し、地面に激突した。
「ぐぁっ…！」
身体中に痛みが走る。
地面から４本の鞭が突き出し、僕の手足を縛る。
動けない…！
「…弱いじゃない」
今の言葉が、僕の胸に突き刺さる。
「…そんなんで進む気？暗黒を止めるなんて口だけね」
僕は…。

僕は一体どうしたらいい？

強くなるには…。

「あー、お楽しみのぉところ悪いんですがぁ、とりあえずぅその男を貰えませんかねぇ？」

あれはさっきの男！
「…何？」
「いやぁ、ちょっとぉ理由は言えませんがぁ、必要でぇ…」
「…そうじゃなくて、あなたは何？」
「人を物扱いぃ！？それはないんじゃぁ…」
「…邪魔」
少女はカードを取り出し、唱える。
「…『フリーズ』」
「『ニードマウス』！」
男の前に大きなハリネズミが現れ、回転。
氷の球を粉砕する。
「『ファイア』！」
今度は炎の球をハリネズミに当てる。
「炎ネズミのぉ、出来上がりぃ！」
ハリネズミの針は炎を纏い、周りの気温が少し上昇した。
氷の鞭が少しずつ溶け、だんだんと動けるようになってくる。
「…『フリーズ』」
少女は氷の球をハリネズミに飛ばす。が、当たる前に溶けてなくなる。
「…っ！」
「残念でしたぁ！さて、これで終わりぃ！」
ハリネズミが少女の方へ、回転しながら突っ込んできた。
「……！」
ハリネズミは少女に当たる直前で止まる。
いや、止められた。
僕が剣でハリネズミの攻撃を受け止めているからだ。
「…なんで？なんで助けるの？」
僕は爽やかな笑顔を作り、
「目の前に困ってる人がいたら、助けるもんなのさ」
そして男の方を向く。

「さぁ、ここからが勝負だ！」

六章　～愛情～

剣でハリネズミを弾き飛ばす。ハリネズミは空中で素早く回転、大きく孤を描きながら突進してきた。
僕は剣を構えながら突っ込んで、ハリネズミへ振り下ろす。が、避けられた。
炎が僕の方へ迫り、服に付いた。
「くそっ！」
服の炎を斬り落とす。
やはり剣だけでは勝ち目が薄いか。仕方がない。
「カードってあと何を持ってる？」
「…色々。自分で見て」
受け取ったカードには複数の種類があった。
『フリーズ』は途中で溶けていた。これよりも強力なものでないと効果がない。
「『アイシクル・ロープ』！」
さっき少女が使っていた氷の鞭ならばハリネズミを越えて男へ攻撃できるかもしれない。
が、魔法は発動しない。
「『アイシクル・ロープ』！」
…やはり発動しない。
「な、どういうことだ！？魔法が発動しない…」
「やっぱりぃ、分かってない！誰でも全てのカードを使える訳ではぁない！」
「それはどういう…」
「…魔法には相性があるの。その相性が合わないと、魔法は使えない。場合によっては暴走することもあるのよ」
つまり、僕と『アイシクル・ロープ』は相性が悪いということか。
「『フリーズ』！」

氷の球が出現し、ハリネズミへ飛んでいく。が、やはり途中で溶けてなくなった。
「『フリズライト』！」
…これも発動しない。
「駄目か…。氷以外のカードは？」
「…無い。それが1番相性が良いから」
一体どうしたら…。
「…返して」
少女にカードを奪い取られる。
「…『フリズライト』」
辺りに冷気が広がる。
「そんなものぉ、無駄だぁ！」
ハリネズミが炎を放出し、気温が上昇。『フリズライト』の効果は打ち消された。
「…『アイスタワー』」
ハリネズミの足元から複数の氷の柱が出現し、ハリネズミにぶつかる。
が、刺さってはいない。氷が溶け、鋭さが無くなっている。
「『フレイ・フラワー』！」
男が腕を地面に付けると、そこから炎が出現し、少女の方へと向かっていく。その炎は少女を中心にバラのように渦巻き、少女を取り囲んだ。
「…『レイズドウォール』！」
少女の周りに氷の壁が出現。氷は溶け水となり、周りの炎を消火した。
凄い…。
今まで魔法なんて知らなかった。そもそも世界に存在していなかったのかもしれない。その魔法がお互いにぶつかり合い、激しい戦いになっている。
ハリネズミが少女に突進。少女に針が刺さる。

黒色の服から血が滴り落ち、少女はその場に倒れる。
少女が傷だらけになって、必死に戦っているのに、僕は何もできない。
助けたいのに、助けられない。
僕も戦いたい。
僕も力が欲しい。
カッ！！！！
僕を中心に激しい光。眩しくて目が開けられない。
光は少しだけ落ち着き、少しだけならば目を開けられるようになった。
目の前には、知らない女性。
「あなたは？」
女性は静かに微笑む。
「力が欲しいですか？」
少し間が開き、更に女性は続ける。
「魔法が欲しいですか？」
「…はい」
これは正直な気持ちだ。
「ならばあなたに力を与えましょう。あなただけの、特別な力を…」
直後、激しい光が起こり、僕は光に飲み込まれる。
気が遠くなる。
…
……
……
気がつくと、景色は元の森に戻っていた。
「今のは…？」
その時気付く。僕が何枚かカードを持っていることに。

これが、僕の力…。
この力で、少女を助けられるかもしれない。
僕は少女の元へ駆け寄り、唱える。
「『ヴェント・ラ・セレナーデ』！」
激しい光。
が、この光はカードを使った時の光とは違う光。
全てを浄化する、聖なる光。
光は風のように辺りへ広がり、ハリネズミを消滅させる。
「そんな馬鹿なぁぁっ！それは伝説の…、何故それをぉぉぉっ！？」
男の声が消える。
光は少しずつおさまり、視界がはっきりしてくる。
「今、のは…？」
どうやら『ヴェント・ラ・セレナーデ』は1枚しかなかったようだ。
が、他にも何枚かカードはある。
あの男もハリネズミもいなくなり、いつの間にか少女の傷も癒えていた。
「大丈夫？」
「…ありがとう」
「…え？」
「だから、助けてくれてありがとう」
それは、今までに聞いたことがない程にはっきりとした声だった。
「…今まで、誰かに助けてもらったことなんて無かった。あたしの親は小さい頃に殺されて、顔を覚えてないの。だから、善意とか愛情とか、よく分からない。でも、これだけは分かる」
少女は少し視線を僕から逸らし、静かに口にした。
「…あなたのことが、好き…」
思わず僕はふらついてしまう。
一瞬の思考停止。
「この気持ちが愛情なのか、罪悪感なのか、分からない。でも…」
僕に視線を合わせる。

「…ただ、あなたのことが好き」
「……」
「…ねぇ、あたしも一緒に行っていい？」
「…あぁ、いいよ」
「…嬉しい。あたしはレネッタ。よろしくね」
僕に、仲間が加わった。
今まで友達なんていなかったし、親しい人もいなかった。だから、これが多分最初の友達。
これからも、こんな風に友達が増えるのだろうか？レネッタとも一緒にいれるのだろうか？
分からない。でも、これだけは分かる。
「よろしく！」

この子は、僕にとって、かけがえのない人だ。

七章　〜情報〜

森を抜けると、遠くの方に大きな町が見えてきた。
あれがシトリルだろう。
割と発展している町で、人も多く賑やかな町。それ故に、各地から人々が集まっている。
ここならば何か良い情報が得られるかもしれない。
「…疲れた」
「あと少しだ。頑張れ」
レネッタはやはり女の子だから、長い距離を歩くのは苦手なようだ。
しかも小柄で華奢な体格からして分かるように、体力はあまり無さそうだ。
「…仕方無い。乗りな」
体を低くし、レネッタに背中を向ける。
「…！あ、ありがとう」
気のせいだろうか？少しレネッタの顔が赤い気がする。
「風邪か？」
「違うわ！いいから背中！」
何故か怒鳴られた。理解不能だ。
とりあえずレネッタが背中に乗ったのでそのまま立ち上がり、おぶりながら歩いた。
小柄だから結構軽い。が、それでも人一人背負っている訳で…。
「…少し重いな」
「…！ふ、太ってなんか、いないんだから！」
肩に軽い衝撃。叩かれたみたいだ。
…やっぱり女の子は難しいな。

◆◆◆

「ここがシトリルか。やっぱ賑わってるな」
あの暗黒でシャインの村は全滅したが、ここは大丈夫だったようだ。
良かった。世界全体が暗黒に呑まれた訳ではないのか。
それならば希望がある。そういえばレネッタも無事ということは、
この辺りには暗黒が届いてないということだろうか？もしかしたら
僕が村で発していた不思議な光による為かもしれない。
本当に、あの光は何だろう？
「…人がいっぱい。少し、怖い」
「大丈夫。僕がいるから」
レネッタは人が苦手らしい。ならば人込みは怖いだろう。
…よし。少しでも安心させてあげよう。
「後ろに背負われるのが不安なら、前で抱き抱えようか？」
「……！」
あ、また叩かれた。
「…えっち」
…やはり女の子はよく分からないな。
「それで、シトリルに来たのはいいけどどこに行くべきなのかさっぱりだな」
いくら人が多くても、情報を持った人がいなくては来た意味が無い。
仮に、道行く人に聞いたとしても、間違いなく不審者扱いされるだろう。特に暗黒のことをよく知らない人からは。
「…とりあえず、酒場がいいと思う」
「え？何で？」
「…ＲＰＧだと、酒場で情報が集められる」
「いや、ＲＰＧと現実は違うから…」
でも、全くあてが無いのなら、試してみるのもいいかもしれない。
酒場…。しかも安心して入れる所は…。
「いや、そんな都合のいい場所なんてどこにも…」
『クランの酒場　素人大歓迎！質の良い情報を約束します。』
「……」

「…あったね」
……。
「いやいや、怪しい気がするんだが！？本当に信用できるのか！？」
「…とりあえず、今はえり好みできない」
まぁ、それもそうか。
「それに…」
レネッタが看板の下の方を指差した。
『入場者にはぬいぐるみプレゼント！』
「…ぬいぐるみも欲しいし」
…本当に信用できるのだろうか？

◆◆◆

とりあえず入ってみた。
プレゼントのぬいぐるみは可愛いクマの形をしている。僕はいらないし、レネッタにあげよう。普段持つ用と予備用として。
「あら、いらっしゃ～い」
今喋った女の人は、この酒場の店員（というか店長？いや、マスターとでも言うのだろうか？）らしい。
「素人さんね？とりあえずカウンター席に座りなさいな」
言われるがままに席へ着く。
「私がこの酒場のマスター、クランよ。よろしく」
「あ、シャインです」
何故か緊張する。
「えっと、二人は親子…て程歳は離れてないわね。兄妹？」
「いや、違うんですけど…」
何て言えばいいのか分からない。他人です、だと誘拐みたいだし、仲間です、というのも…、まぁ悪くは無いが。ＲＰＧの中ならともかく現実だと少し恥ずかしい。
などと考えていると、

「まぁいいわ。それで、どんなご用かしら？」
「…この前の暗黒について何か情報はありませんか？」
「あ、その前に何か注文してね。最低限のマナーよ」
そうなのか。
とりあえずミルクを二杯頼んだ。
レネッタはぬいぐるみをいじくりながら、ちびちびとミルクを飲んでいる。
「それで、暗黒は…」
「どうやら、あの暗黒はウレキス近くの洞窟から来たらしいの。ただ、この辺りは少し前の不思議な光のおかげで呑まれずに済んだみたいだけどね。暗黒は結構遠くまで広がってるらしいわよ」
ウレキス…。なかなか距離があるな。だが不可能な距離ではない。
「あんた達、そこまで行く気かい？」
「はい。どうしても確かめたいんです」
「なら途中で海を渡らなきゃいけないわね。まず港町のヒースに向かいなさい」
ヒースか。少し距離があるな。
「ただ、気をつけなさい。あの辺りの最近の情報は無いの。何が起こるか分からないわ」
情報が無い…。それは確かに気になるな。こんなに詳しい人が分からないのか。
「分かりました。では」
レネッタと酒場を出た。
ヒースか。何があるかは分からないが、行ってみるしかない。
「…くま。…可愛い」
…とにかく、目的地は決まったな。

八章　～静寂～

シトリルを出てから、結構な時間が経った。ヒースは割と遠いところにあるため、今は途中の村を探している。レネッタがいる今となっては、そう野宿などする訳にはいかない。
「レネッタ、平気か？疲れてない？」
「…まあまあ平気」
この前と違い、レネッタは自分で歩いている。
酒場でもらったクマのぬいぐるみはかなり気に入っているようで、いつでもずっとぬいぐるみと手を繋ぎながら歩いている。
「ぬいぐるみ、気に入っている様で良かった」
「…ピットはあたしの友達」
レネッタがふっと微笑んだ。
そうか。名前まで付けてあったんだな。
それにしても、シトリルを出てから村などは一向に見つからない。このままでは本当に野宿になってしまうかもしれない。女の子に野宿をさせるのは気が引ける。森で会ったときも家は、簡単だが作ってあった。なんとしても村を見つけなければ。
「レネッタ、乗って。少し走るからな」
「…うん。分かった」
この前と同様に、腰を屈める。
「…ただし」
「ん？どうした？」
「…えっちなことは禁止」
「絶対しないから安心しろ！」
何故か最近、警戒されている気がする。別に僕はロリコンでは無いし、そもそもレネッタのことは保護者としての目でしか見ていない。確かに大切な仲間ではあるが、それでも保護者としてレネッタに怪我をさせる訳にはいかない。それなのに、まさか僕がレネッタに手

を出そうとしているだなんて思われるのは困る。
何はともあれ、レネッタのことは無事おぶることができた。レネッタも僕のことをがっしりと掴んでいるから、そう振り落とされることも無いだろう。
「よし、それじゃ走るぞ！」
「…わーい」
妙に感情のこもっていない歓声が少し気になるところだが、まぁそれはいい。
こうやって走っていけば、きっと早く村を見つけることができるハズだ。

◆◆◆

しばらく走り続け、体力も限界に近づいてきたところで、やっと村を見つけることができた。
だが…。
「…静かだな。いや、それ以前に、人の気配が無いな」
村の中を歩いている人はおろか、建物の中でさえ誰もいない。
店の中を見ると、販売中の新聞の日付が数日前になっていた。この日は確か、僕の村が暗黒に呑まれた日だったハズ。
「まさか…、ここの人達皆あの暗黒に？」
「…高確率」
僕の村もそうだった。僕以外は皆いなくなっていた。
ならば、暗黒に呑まれた人達はどこへ行ったのだろうか？
死んでしまったのだろうか？それとも、どこか別の場所に捕われているのだろうか？はたまた、呑まれた人達は皆、魔物に変わってしまったのかもしれない。
「…とりあえず、今晩はこの村で過ごそう」

この先にまた村がある保証は無い。勝手に泊まるのは気が引けるが、この際だ、仕方が無い。
「…分かった」
レネッタと二人で、近くにあった宿に泊まることにした。

◆◆◆

「レネッタはこの部屋。僕はその向かいの部屋だからな」
「…分かった」
そう言い、シャインは部屋から出ていった。
二人が別々の部屋になったのは、やっぱりシャインが気を使ってくれたから？あたしが女の子だから…。

むしろ、あたしは同じ部屋の方が良かったのに…。

シャインは、あたしを嫌っている訳じゃない。それは分かる。でも、あたしが女として愛されてはいないことも、分かる。シャインがあたしを見る目はいつも、親が子供を見るかのような目。
シャインに助けてもらってから、あたしはシャインのことが好きなのに、あまり気付いてくれない。
「…どうしたら振り向いてくれるかな、ピット…」
そっとピットを抱き抱える。
「お前がレネッタか？」
背後から声。
「…あなた、何？」
その声の主は男。でも、この部屋のドアや窓から侵入してきた形跡は無い。
「俺はユーチェ。ふっ、不思議そうな顔をしているな」
そう言い、ユーチェは一枚のカードを取り出した。
「俺はただ『スペース』のカードを使っただけだ。これを使うと…」

カードをかざし、
「『スペース』」
ユーチェのカードが光る。直後、ユーチェの姿が消え、
「空間を越えることができる」
「…！」
いつの間に！？
気付くと、ユーチェはレネッタの真後ろにいた。
「悪いが、お前には消えてもらう！」

九章　～部屋～

「『グランブロン』！」
ユーチェは頭上に腕を上げる。そして広げた両手の平の中心に、大きな岩が現れた。
「『フリズレイド』！」
辺りに冷気が立ち込め、部屋が凍り付く。
「『アイシクル・ロープ』！」
レネッタの足元から氷の鞭が延び、飛んできた岩を縛り、砕く。
「まぁまぁ使い慣れてはいるようだな。だが…」
ユーチェはカードを取り出した。
「『ロックレイン』！」
直後、レネッタの頭上に無数の岩が出現する。
「それでも俺には敵わないがな」
岩はレネッタへ降り注ぐ。
岩の落下速度は速く、避けることはできない。
「くっ…。『レイ…』」
間に合わない！
避けることも防ぐこともできないまま、岩の雨に呑まれた。
「もう終わりか…。呆気なかったな」
ユーチェは背を向け、部屋の扉へと向かう。『スペース』はまだ残っているのだが、無限にある訳ではないため、計画的に使用することが大切なのである。
ユーチェがドアノブを掴もうとした時、
「『アイシクル・ロープ』！」
突然現れた氷の鞭に腕を掴まれた。
「…生きていたのか」
ユーチェはガレキの山を見た。ただガレキが山になっているだけのハズのその場所には、潰されているハズの少女が立っていた。

「…あの程度じゃ、死なない」
レネッタが一歩分後退し、鞭を動かす。
が、鞭はびくともしない。
「甘いな」
ユーチェが腕に力を入れる。すると、鞭がブチブチと切れていった。
物凄い筋力。でも、負けられない！
「『スリップ・バーン』！」
ユーチェの足元に氷の板が出現し、ユーチェの足をすくう。
「ちっ…！」
倒れかけた体を空中で捻り、氷の板の横へ着地する。
「…ナメた真似してくれるな」
ユーチェが突っ込んできた。魔法無しの、力のみの攻撃だ。
でも、あれなら対抗できる。
「『フリズアロー』！」
レネッタの左手に弓が現れた。
「…当たる！」
右手に氷の矢が現れ、弓に合わせ弾く。
氷の矢はユーチェの拳へ命中し、そのまま腕を貫通…、
「甘い！」
しない！？拳に当たるなり、矢が砕け散った！
「…くっ！『レイズド・ウォール』！」
レネッタの目の前に氷の壁が出現する。これならば防げるハズ。
「ふん、その程度か！」
ユーチェは壁を思い切り殴った。すると、壁にヒビが入る。
そん…な！
そのままレネッタは拳を叩きつけられ、部屋の隅へ弾き飛ばされた。
矢と壁のおかげで拳の勢いは小さくなったものの、ダメージは大きい。
だが、あれはただのパンチなのだ。魔法ではなく素手の攻撃なのだ。
すぐに次の攻撃が来る。次に来たら、多分終わりだ。負ける。

でも、こんなところであたしは負ける訳にはいかない。まだやりたい事もあるし、シャインにも気持ちを伝えきれていない。
…負けられない！
「さて、これで終わりだな」
ユーチェが拳を構える。
もう、躊躇っている場合じゃない。

とっておきのカードを使おう。

大きく深呼吸し、息を整える。
…これで決める！
「死ねぇぇぇぇっ！」
ユーチェが迫ってきて、とうとう目の前まで来た。
「『アイシクル・ドロップ』！」
レネッタのカードが激しく光り、辺り一面が真っ白になる。
そして光が消えると…、
「なんだこれは！？」
部屋全体に手の平サイズの氷の結晶が無数に浮かんでいた。
その結晶はレネッタの手の動きに合わせて移動している。
結晶がユーチェを取り囲む形になると、レネッタは別のカードを取り出した。
「…『フリーズ』」
が、レネッタの周りでは何も起きない。
その代わりに、『フリーズ』の魔法はユーチェを囲む全ての結晶からユーチェに向かい、発動した。
「何！？」
囲まれているため、ユーチェは避けることができない。至近距離からの攻撃のため、魔法でガードすることもできない。
そのまま『フリーズ』は、全弾、ユーチェに命中した。
「ぐわぁぁぁぁぁっ！」

ユーチェは、その場に崩れ落ちた。
「…あたしの、勝ち」
返事は無い。
しばらくの間、室内は静寂に包まれた。

それから少し経つと、突然、ユーチェが立ち上がり、カードをかざした。
「今回は諦める。が…」
ニヤリと笑いながら言う。

「これで終わりだと思うな」

「…それはどういう…」
「『スペース』！」
次の瞬間、ユーチェは跡形も無く消えていた。
レネッタはベッドへ倒れ込む。
今回は何とか勝てた。でも、もう『アイシクル・ドロップ』は無い。
次に襲われたら、負けるかもしれない。
それでも、あたしは大丈夫。不安は無い。

だって、シャインがいるんだから。

レネッタは一瞬、フッと笑い、布団に潜る。
それから数分後、部屋はレネッタの小さな寝息のみが聞こえている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0112j/

封じられた運命の石版

2010年10月14日16時59分発行